

live in bloody AmazonZ

サードニクス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アマゾン牧場の計画が倒れて二年。突如野座間製薬神奈川支所に凍結されていたアマゾン達が目覚めてしまう。

何者の意図か分からないまま、川崎は地獄の街へと変貌していく。

その血塗られた混沌を、生き延びられるのか。

というわけで仮面ライダーアマゾンスの読者参加型。地域などの要素により、駆除班や4Cメンバー、悠はほぼ出番はないです。

目次

Cool and black	20
Buthe was dead	12
Amazon wakes again	8
本編	
募集要項	1

## 募集要項

・仮面ライダーアマゾンズの世界観で  
神様や宇宙人が絡んでくるお話ではないので。

・オリジナルキャラで

既存のキャラでは面白くありません。あなたが新しく考えましよう！・・・ただし、あなたがアマゾンズの世界観で作ったキャラなら話は別！設定にさえそぐっていれば可能です。

・一人一キャラ！

あまりキャラが多いと收拾がつかないので・・・。

・あくまで仮面ライダー！

募集はベルト持ちのアマゾンのみとさせていただきます。

・死にます

結構高確率で死にます。キャラを応募できるのは死ぬ食われる殺される犯されるなんでもありな方に限ります。

・送れる形態は二つ

アマゾンズドライバーを使う形態とネオアマゾンズドライバーを使う形態の二つです。無論片方でも大丈夫！アマゾン形態がある場合はキャラの概要にデザインを書いてくだされば。書いてなければ登場しないか私が勝手に考えます。というか書いても出ないかもです。

・強さは同じくらい

みんなオメガぐらいです。

・恋愛します

あなたの子とあの人の子がくつつくかもです。

・サブキャラは一人

アマゾンにならないサブキャラを送れます。下のシートからタイプを抜いて書いてください。

以下シート。書いたら活動報告に

名前：

性別：

年齢：

容姿：

タイプ：

性格：

概要：

サンプルボイス

┌

名前：仮面ライダーアマゾン

モチーフ生物：

容姿：

概要：

ベルト：

武器

┌

武装

┌

必殺

┌

変身音声&ボイス

┌

┌

サンプルボイス

┌

名前：キャラクター名です

性別：基本的に男女。

年齢：作られたアマゾンの場合みんな同じなので外見年齢です

容姿：キャラデザ。服装や髪型

タイプ：アマゾンとしてのタイプ。以下から選択を。溶原性アマゾ

ン細胞は今回は出て来ません。

・基本タイプ

マモルなどのように、普通に作り出されたアマゾンです。

・アルファタイプ

仁の様に人間が自身にアマゾン細胞を埋め込んだタイプのアマゾンです。

・オメガタイプ

悠のように人間の細胞とアマゾン細胞を合わせて生まれたアマゾンです。

・シグマタイプ

前原のように遺体にアマゾン細胞を植え込んだものです。

・ネオタイプ

アマゾンと人間の子です。諸事情により溶原性アマゾン細胞はありませんのでご安心を。

他にあればメツセージでお話を

性格：キャラの性格です。

概要：どのような経歴の人物か・・・などです。

サンプルボイス

「セリフです。」

名前：仮面ライダーアマゾン○○○○という名前をお願いします。アマゾンズドライバーで変身する場合はギリシャ文字をお願いします。ネオアマゾンズドライバーのみの場合は何かしらの単語です。すでにアマゾンズドライバーで変身するキャラがネオアマゾンズドライバーで変身する場合はアマゾンズドライバー時の名前に何かしら単語を足してください。

モチーフ生物：ベルトがない場合何アマゾンになるかです。

容姿：どんなデザインのアマゾンかです。

概要：戦闘スタイルやどのような奴なのか

ベルト：基本的にアマゾンズドライバーかネオアマゾンズドライバーですが、オリジナルのアイテムがある場合、それで変身するキャラを送る前にどんなアイテムか私にメツセージで送ってください。考えたのちお話しします。アマゾンズドライバーならタレ目かつリ目か。そして目の色。ネオならインジエクターの色もお願いします。

色はバイザーの色と同じです。

武器

』  
体の一部です。アルファの場合はこれしかありません。武器しかもしくは武装しか使わんつてのもあります。

武装

』  
バトラグリップの変形したものが、ネオアマゾンドライバーによって腕から出現するもの。三つまでです。

必殺

』  
こちら三つ。『バイオレント○○』『アマゾン○○』でお願いします。

変身音声&ボイス

』  
アマゾン!をいうタイミングと変身音声です。音声はネオアマゾンズドライバーなら『NEO』のようにライダー名のみ。アマゾンズドライバーは『ALPHA: blood and wild! wi wi wild!』という感じで英語音声です。掛け声に関しては、

「アマゾン」『ALPHA: blood and wild! wi wi wild!』か『ALPHA:』「アマゾン」『blood and wild! wi wi wild!』かのどちらかのタイミングです。セリフはアマゾンでもウアマゾン!!でもアマゾンでも何でも。アマゾンとさえ言っていれば。

サンプルボイス

』  
戦闘時ボイスです。

例

名前:富田真

性別：女

年齢：31

容姿：茶髪ロング。普段は白衣を着ている。

タイプ：アルファタイプ

性格：穏やかで優しい。

概要：野座間製薬でアマゾン生命体の研究をして居た女性。川崎市での脱走事件を聞き、自身にアマゾン細胞を投与。仁のように自らアマゾンとなった。覚醒済みのアマゾンを潰すのが目的。

サンプルボイス

「やあ。ボクは真。よろしくね」

「こいつは困ったぞ・・・」

「ボクは君を助けたいんだ」

名前：仮面ライダーアマゾンデルタ

モチーフ生物：ホツキョクオオカミ

容姿：白く刺々しい体。複眼は青。

概要：真の変身した姿。各所の棘での攻撃が特徴。暴れるような戦闘スタイルで、棘と鎌がメインウエポン。

ベルト：アマゾンズドライバー

青のツリ目。

武器

『アームカッター』

オメガと同じもの

『牙』

鋭い牙。噛みつきを行うが、食べることはない。

『爪』

手足のもの。

武装

『鎌』

バトラグリップが変質したもの。オメガの物と同じ。アマゾンデルタのメインウエポン。

必殺





『アマゾンサイス』

右腕から展開される鎌。

『アマゾンブレイド』

右腕から展開される剣。

『アマゾンクロー』

アマゾンブレイドの側面に刃が出現することで完成するクロー。  
必殺

『アマゾンスラッシュ』

クローでの斜め切り。

『アマゾンストライク』

足爪によるまわし蹴り。

『アマゾンブレイク』

鎌で何度も切りつける技。

変身音声&ボイス

「ウゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝオゝ!!!」

『HIGH DELTA』

「アゝマゝゾゝンゝ!!」

サンプルボイス

「勝てるものならかかって来な!」

「ボク自身驚いてるよ。こんなパワーが・・・」

## 本編

### Amazon wakes again

「がはっ……」

暗闇の中で血を流し、白衣の男が倒れる。0.1秒前に命だったそれはゴミのように捨てられ、踏み潰された。

「お前……」

そこに女性が駆けつけるが、男を殺した化け物はすぐに闇へと逃げていった。

「……クソツ!!この人が……トラロックに関わった最後の人だったのに!」

悔しさに任せ机を蹴り倒す。女性の顔は険しかった。

「トラロックの計画書が全て消えた?データからも?バックアップも!?!」

報告を受けた女性、水澤令華は苦悶の表情を浮かべていた。神奈川の支社より脱出した1000匹あまりのアマゾン生命体。打開策であったトラロックの計画書は何者かに消され、研究に直接関わった人間は死亡。打つ手なし。0からの開発であった。

「また駆除班や4Cに頼る形になるのかしら……悠には生きていてもらわなければいけないのに……」

ため息のちブラインドを閉じた。

「……やっぱりこうするしかないか。準備して」

先ほどの女性、富田真は部下の研究員に命じて準備をさせていた。

「本当にやるんですか?」

「それしかないでしょ。ボクは覚悟できてる。さあ、渡して」

受け取った注射器を腕に差し込み、ゆっくりと注入。そして急いでもう一滴を注射した。

「・・・うう・・・うわああああ!!」

真は突如椅子から転げ落ち。絶叫を上げながら転がり回る。

「大丈夫ですか!」

研究員が駆け寄ろうとしたところ、突如真の動きが止まる。

「あれ・・・?」

「ううっ」

弱々しい声とともに蒸気が噴出。中から白い影がゆっくりと起き上がる。白衣ではない。全身白い毛に包まれたバケモノが起き上がった。

「・・・成功か」

「これであなたも・・・」

「アマゾン・・・だね。まあいいさ。最初っからそのつもりだ」

そうため息混じりに言うと、人間の姿へ戻った。

「ん、ボクはそろそろ帰るとしよう。じゃあね。気をつけるんだよ」

背をゆっくりと伸ばすと、白衣をしまつて外に出た。

「ふああ・・・眠い」

外は既に真っ暗。バイクに乗って自宅へと突っ走っていた。

そんな中、バイクの前に人が飛び出る。思わず真は急ブレーキ。バイクを降りた。

「危ないよ!ボクが止めてなかったら死んでたぞ君」

「いや・・・どっちにせよお前が死んでいた」

バイクの前の男は蒸気とともにバケモノの姿に変わった。

「なんだとお・・・!!」

素早くバイクに乗ると、そのミミズのバケモノに突撃。流石にかわされるが、距離を置くことには成功した。

「全く・・・面倒なことだよ。ボクは早く帰りたいのに」

ブツブツと恨み言とともに黒いベルトを取り出し、腰に巻きつけた。

「ったく・・・鷹山仁に感謝だよ。アマゾンズドライバーだっけ?」

「させるか!」



苦しみながらも左手を再び伸ばす。

『Violet:slash』

その腕を強化したアームカッターで腕ごと切断。黒い体液を浴びながら鎌を抜き取る。

「このー！」

諦めず右手で拘束。しかしフリーの足で顔面にハイキックを叩き込まれ、怯む。

「うおおおー！」

そして右肩に噛みつき。その肉を引きちぎって吐き出した。

「ぐう……！」

隙ができたミミズアマゾンの正面に立ち、グリップをひねる。

『Violet:brake』

そして脳天に一撃。そのまま腹のあたりまで引き下ろした。

「な……」

苦しみの声すらあげる前に死に絶え、ドロドロと黒い液体へと戻った。

「ふう……」

風が戻るように吹き込み、人間の姿へ。大きなため息とともにバイクにまたがり、また家へと向かった。

B u t h e w a s d e a d

ブーブー!

アラームが鳴る。

ブーブー!

警報が響く。

「はあ．．．はあ．．．」

赤い光を受けながら逃げる少年。腕にかかった鎖で動きづらそうに走っていた。

「逃げなきゃ．．．死にたくない．．．!」

目の前で殺された他のアマゾンたちを見て、自ら死を選んだはずの彼はなぜか生存欲求に駆られた。

いじめに耐えかねて自殺を選んだ少年にアマゾン細胞を植えたもの。それが彼、蓮原光だ。

「見つけた!」

そんな中、曲がり角から真が現れる。諦めて死を覚悟した彼の腕を引っ張って走り出した。

「ほら何やってるんだ。逃げるよ。ボクに付いてきて!」

どうやら自身を逃すつもりだと光は気づき、素直に付いて行った。

「お姉さんはなんで．．．」

「富田真。もう結構なおばさんだよ」

「．．．真さんはなんで僕を逃して．．．」

「それで問題ないとボクが判断したからだよ。いいから逃げるって」  
警備員を蹴倒し、二階の窓ををこじ開けて外へ。道を通った野座間のトラックの荷台の上に飛び降りた。

「よし!サンキュー山さん!」

運転手はどうやら真に知り合いらしい。運転したまま左手でサムズアップを見せた。

「ちようどいいとこで降りるよ。これは機械系の廃棄物輸送トラックだから．．．一緒にスクラップになっちゃう」

「ありがとうございます．．．!」

「追っ手は来ない・・・よし。君は確か蓮原光。よろしくね」  
軽く挨拶を済ませて息をついた。

「改めて。ボクは富田真。あそこの研究員だ。一応元人間のアマゾン。人は食べないから安心して」

そういうとバッグの中のベルトを見せ、優しく笑った。

「君も人を食べたら・・・」

「・・・真さんに始末される?」

「そう。まあボクじゃなくて水澤悠とかの可能性もあるけど・・・って  
いか山さん運転下手になったね。こんなに揺れ・・・!?降りろ光!!」  
「え!?!」

運転席を覗き見た途端慌て出す真。光をつかんで荷台を飛び降りた。

すぐにトラックも止まり、慌てて光は中を覗き込んだ。

「フーツ・・・フーツ・・・」

アマゾンだ。すでに山さんはおらず。血と肉片とネズミのバケモノだけがそこにあつた。

「どうやって侵入したんだか・・・」

「くそっ・・・食っちゃまった・・・どうせお前らは俺を殺すんだろお  
おお!!」

理性のタガの外れたそいつは大声をひねり上げて突進。真へと向かう。とつさにベルトを出す・・・が、そいつの一撃で遠くへ跳ね飛ばされる。

「全く・・・!」

今度は蒸気を吹き上げてオオカミアマゾンに。ネズミアマゾンを殴りつけた。

だが相手のランクが高いのだろう。むしろ押されていた。

「強い・・・!」

「真さん・・・僕が・・・!」

今度はこちらがアマゾンに。蒸気の中から赤のクワガタアマゾンが飛び出た。

「うあああああ!」



アゴのツノで攻撃。叩きつけ、叩きつけ、挟む。

「この・・・」「おら！」

そこにオオカミアマゾンの引つ掻き。軽く傷を負ったため、トラツクに乗って撤退を決めた。

「待て！ボクのアマゾンズドライバー・・・つたく・・・」

深々とため息。歩いてそれぞれ目的地へと向かった。

「ここが君の家か・・・いいのか？虐待があつたんだろ？」

「でも・・・僕の住む場所なんてここだけですから」

暗い顔とともにドアを開け、自宅へと入って行った。

「えつと・・・ただいま」

「ひ、光!?なんでここに」

たまたま玄関にいた母親はその顔を見て腰を抜かす。そのまま逃げ惑うようにリビングへ入って扉を閉じた。

「幽霊!おぼけ!」

焦りのあまりか言葉になっていない。光はドアを叩いて開けてくれと頼んだ。想定外だったのはドアが壊れたこと。

「バケモノ!」

「そんな・・・お母さん達なんですよ？僕の遺体を実験に使わせたのつて」

「でも死んだはず・・・」

「それは・・・蘇らせる実験なんですよ」

「私達を・・・殺す気!?!やめて!!来ないで!!」

恐怖のせい言葉が支離滅裂だ。焦った様子で警察に電話をかけた。

「そんな・・・!」

家にも意味はないらしい。自分の部屋から持つものを出して家を出た。

「予想通りだね。可哀想に」

家の外には変わらず真がいた。呆れ混じりの困り顔でつぶやいた。

「そうそう。この辺にホームレスのコミュニティがあるんだとき。そこに行ったらどうだい？案外、アマゾンも居たりして」

「そうかもしれないね・・・」

真と別れ、川辺に向かうことに。たしかに結構な人数のホームレスがボロテントで生活していた。

「・・・新入りか？」

「結構若い子ですね」

そこにはくたびれたおっさんもいれば、中学生ほどに見える少女も居た。

「・・・あの、よろしく・・・お願いします・・・蓮原光です・・・」

「よろしくなボウズ」

「よろしくお願いします」

丁寧に。しかしオドオドと挨拶を済ませ、テントの横に座った。

「ごめんなさい・・・今あなたの入れるスペースがないんです」

赤髪と野球帽の少女は申し訳なさそうにテントを見た。

「いいんです。僕なんか外でも・・・」

「卑屈だなボウズは・・・あんたが一番綺麗ななりしてんな。よし。この金でテント買ってこい。近くにホームセンターあんだろ」

「ガンさん!?!それ、工事現場で稼いだ・・・あなた、久々にご馳走食べるって息巻いてたじゃないっすか!」

「うるせえな。このボウズの歓迎会に変更だ。俺一人でいい飯食ってられるかよ」

「でも・・・僕・・・」

「いいから買ってこいって。早くしろ!」

「あ、ありがとうございます・・・」

もらった一万円を握りしめ、ホームセンターへと走った。

「あのアマゾンどもが・・・どこかに!」

同刻。公道ではトラックが爆走。逃げたいのと復讐したい気持ちが混ざっていた。もつとも、ベルトがその手にある以上気が強くなっているのだ。復讐がメインだろう。



「あああッ！」

だが彼女まで出る時間はなかった。その内臓を押しつぶされる。

「ううっ……ああ……」

「真さん！……僕が……！」

煙を吹き上げアマゾン化。しかしトラックは持ち上がらない。

「ボクは助けなくていい……戦うんだ！」

「でも……」

「ボクと一緒に下敷きだつて？……確かトラックの廃品にあるはず」

その言葉を受け、中を漁る。確かに黒いたれ目のドライバーが出てきた。

「させるか！」

ネズミアマゾンが駆け寄る。光は焦ってグリップを捻った。

『SHIGMA……』

「ううっ！」

しかし光に負担が入るだけ。苦しみの声をあげて彼はしゃがんでしまう。

「何で……」

「シグマ用の調整をされてるんだ……コンドラーコア……目のところをひっくり返して入れ換えろ！ファイだ！」

「分かりました……！」

坂を滑って接近するネズミアマゾン。焦りはいつそう強まる。

「こうかな……？」

つり目へ入れ換え、グリップへ手を置いた。

「……あ、ま………ゾオオオオオオオオン!!!」

雄叫びで気合いを入れ、全力でグリップを捻る。

『FAI……』

起動。ドライバーの目が黄色く発光する。

「何い……」

赤の熱風。赤い火を広げ、その姿を現す。

薄紅の体と黄色の目。アマゾンシグマに似たそいつは仮面ライダーアマゾンファイ。

「助けます．．．！」

そしてゆつくりとトラックを持ち上げてどかし、アマゾンデルタを助け出した。

「ありがとう．．．き、奴を倒すか」

腹を抑えてふらふら立つデルタ、トラックに寄つかかって鎌を持った。

「真さんはあまり動けないし．．．僕が戦うしかないのか．．．戦いたくはないのに．．．」

少し迷いながらアームカッターで斬りかかる。しかしこれは掴まれて効かない。アマゾンファイはネズミアマゾンを押しのけ、バトラグリップを引き抜く。

「．．．変な形の剣だね」

アマゾンファイはそれを見たあと、なにかを思いついたかのように剣を分離させた。この武器はそういうもの。双剣である。

「うあああああ!!」

悲しみ交じりの咆哮。ネズミアマゾンへ斬りかかった。右は防がれるが、左はフリー。そのギザギザした刃で引き裂くように傷をつけた。

「うう．．．！」

その隙に連撃を叩き込み、壁へと押さえつけてその腕を振り上げる。

が、彼はその腕を振り下ろせない。隙を見たネズミアマゾンに頭突きを食らう。

「くっ．．．」

殺す覚悟ができていないのだ。迷った手で剣を持った。

「彼には無理か．．．やっぱりボクが．．．」

無理矢理起き上がり、近づく。しかし力を出せるわけもなく、食らった蹴りに再び坂を叩き落される。

「ふん．．．大したことないな」

そしてネズミアマゾンが坂を下りる。

『Violent：slush』

・・・その背中へアマゾンファイの斬撃。怯んだネズミをメツタメ  
タに切りつけた。

「ぐっ！」

血を吹き出しながら坂を転がり落ちる。今だとばかりにアマゾン  
デルタもグリップをひねった。

『Violent:strik』

「死ねっ!!」

ネズミアマゾンへ爪を利用した回し蹴り。体を上下に分割される  
と、ネズミアマゾンだったそれはすぐに黒いドロドロへと変わった。

「終わった・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

「ありがとね。わざわざボクを」

「別にそんな・・・ぼ、僕も助けてもらいましたから」

「ん、そっか・・・そうだ。君にプレゼントがある」

真は思う出したかのようにカバンを漁り、腕輪を取り出した。

「君は実験中食人欲求が見られたらしいね。これ、痛いけどつけて。  
食人欲を抑える薬が入ってる。五分分」

青いアマゾンズレジスターだ。光は怖がりながらもゆっくり腕に  
つけた。

「痛い・・・！」

「ごめんね。こうするしかないんだ。くれぐれも人は食うなよ?」

少し申し訳なさそうに光を見た。

その様子を遠くから見届けるものが。

「蓮原光・・・か。富田真は人間だからなんとも言えないが・・・アイ  
ツはいつか狩らなきゃな」

そう言っつて、カバンの中のネオアマゾンズドライバーを見る。男は  
ひとまず帰路についた。

## Cool and black

「……人喰いのバケモノ？」

「ああ……少し前に騒ぎになってたろ。最近ホームレスその怪物の被害に会ってるんだとき」

光は仲間のホームレスたちからスマホを見せられていた。どうやらアマゾンらしい。あまり関わりたくないが、いずれ自分が狩るのかもしれないと、今のうちから頭を抱えていた。

「やあ。皆さん元気？光もどうだい？」

そんな中真がテントに顔をのぞかせた。アマゾンである光が居ることもあって、少しだけホームレスに援助をして居るのだ。キョロキョロと周りを見てから紙袋を置き、光をテントの外へ呼び出した。

「……？どうかしたんですか？」

「……実はさ、ホームレスを狙った……」

「アマゾンですよ。聞いてます」

「そうか。なら話は早い。ボクはそいつらを狩るつもりなんだが……手伝ってくれないかい？」

真が今日来たのはこのためでもある。しかしその言葉に光は渋る。彼は戦うのはあまり得意ではないのだ。

「目的は同じだか水澤悠でも良いんだけどさ……彼はどこに居るか分からないことが多いからね」

しかし命の恩人からの頼みでもある。思案ののち、光は頷いた。

「そいつは良かった。じゃあ、行こっか」

「え？今ですか？」

「じゃなきやいつさ」

言いつつマンホールを外し、当然の権利のように入っていった。戸惑いつつも彼はそれに続いた。

「……確かに血の匂いがするね」

被害のあった方に二人は向かっていた。確かに戻れば戻るほど変な匂い。警戒してアマゾンズドライバーを装着し、二人は進んだ。

「肉……の……匂いだあああああ」

悪い予感ほどよく当たるとは言ったもの。蟬幼虫のアマゾンだ。腕にレジスターはなく、代わりに傷跡がある。

「つたく……うおおおおおおお!!」

「アマ……」

「アマゾンツツ!」

「ゾオオオオオオオオオオオオオン!!」

『DELTA:』『FAI:』

『bite and fang! fa fa fa fa f a f a n g!』

白と赤の波動。炎とともにアマゾンデルタ、そしてファイが現れた。

「はっ!」

真っ先に飛び出すのはアマゾンデルタ。爪を突き立て、切り傷を叩き込んでいく。

しかしあまり大きなダメージではない。助けを求めてアマゾンファイの方を見た。

「あん……まり……戦いたくないんですけどね……」

バトラーグリップの変質した双剣で攻撃。素人丸出したが、そこはアマゾンファイの性能で押す。

そしてアマゾンデルタのキックの追撃。さらにチョップを叩き込もうとしたその時。

「う……あああああ!」

もう一匹蟬の幼虫型のアマゾンが突撃。アマゾンデルタは跳ね飛ばした。だが倒れるわけにも行かない。すぐに起き上がってセミアマゾンにキックを叩き込んだ。

「君はこつちと戦って。ボクはこいつの相手をする!」

片方を引つ張り、押しつけるようにセミアマゾン同士の距離を離れた。

「でや!」

鎌を抜いて攻撃。肩に刺さったそれを思いつきり引つ張った。



「あああー」

セミアマゾンが声を上げて苦しむ。今だと鎌を再び振り上げるが、背中から何かがぶつかる。

「うう・・・」

アマゾンファイダ。どうやら吹っ飛ばされたらしい。わざわざ一對一に持ち込んだと言うのに、ふたたび二対二だ。

「しょうがない。ボクがやる。君も続いて」

『Violent::slash』

両手を構えて、セミアマゾンに突撃。目の前でスライディングに体制を変えつつ間を抜け、二対両方にダメージを与える。

『Violent::strike』

そしてアマゾンファイは飛び上がりドロップキック。両足を広げ、フットカッターを両方に突き立てた。

「ぐっ・・・」「ああ・・・」

そして落ちる勢いに任せ胸まで引き裂く。飛び出る黒い血を浴びつつ、ゆつくりと立ち上がった。

その目の前でセミアマゾンは絶命し黒いドロドロへと溶けていった。

「はあ・・・二体相手は・・・疲れるね」

変身を解除して座り込む真。その上に光が倒れ込んだ。

「え？ちよつとどうしたのさ」

「うう・・・」

「背中に・・・傷が・・・大丈夫かい？立てる？」

心配して覗き込む真の顔に目を向けつつ顔を横に振った。

「・・・じゃあ、休憩してよっか」

光を座らせてそのまま休ませた。

「おい、どうした」

その最中、黒いコートの男が二人に話しかけた。

「細かいことは言えない・・・って言うか君アマゾンを狩りまくってるっていう桐原作久間だろ？ボクは対象じゃないのかい？」

「お前は人間だからな・・・だが」

「コイツはやらせないよ。数少ない味方でね」

鋭く切り返し、作久間を睨みつけた。右手にはドライバー。

「戦える状況じゃないやつを・・・人の姿のまま殺すのは気が引けてな・・・」

そう言って座り込むと、「食うか」と光にホットドッグを渡した。

「・・・あ、ありがとうございます・・・」

「・・・戦場で会ったらお前は狩らなきゃならないからな。くれぐれも俺に会わないことだ」

そう残してゆつくりと立つと、歩きながら暗闇へ消えていった。

「こいつは・・・まずいな」

真の家で光は治療を受けていた。その真も真で深刻な面持ちだった。

「・・・桐原さんですか」

「彼の存在というより・・・彼がいたこととホットドッグだ」

「・・・何か・・・変なことが・・・」

「彼ネオアマゾンズドライバーを持っていただけだし、使用済みのアマゾンズインジェクターも持ってたんだよ。変身した・・・つまり・・・」

「セミが・・・まだいる・・・」

「そう。そしてホットドッグを買う金銭的余裕。つまり身分証を作ったんだ。ヤのつく人と関わってね。どのルートで？簡単だ。トラロックや4Cの大規模駆除から生き残ったアマゾンが裏社会にまだ残ってたんだ。そう・・・地下にね」

「あのアマゾン達が・・・」

「ああ。腕輪は千切ったんだろうね。そしてまだ幼体なのを考えれば・・・ジユウシチネンゼミアマゾンだね。そしてあの幼虫の様子と潜伏期間を考えれば・・・目覚めるのは・・・今日でもおかしくないぞ。多分明日だ」

今度こそ光の顔も真っ青になる。あれほど強い相手が何体も居て、

一気に活動する上これから強くなるかも知れない。話は深刻だった。  
「コイツを使うか……」

光に包帯を巻き終えた真は自身のデスクからネオアマゾンズドライバーを取り出した。

「……やるしかないか。羽化しだしたらコイツを使う」

そしてカバンにしまい、椅子に座り込んだ。

翌日。下水道にて。

『OMEGA…』

「アマゾン！」

『evolu::evo evolution』

「人を食べるなら……僕は君たちを狩らなきゃいけない……はっ！」  
残るセミアマゾンを駆逐するため、アマゾンオメガが同士狩りを始めていた。

「よし……」

同じ頃、真も狩りの準備を始めていた。ネオアマゾンズドライバーを握りしめ、カバンにしまう。

「行ってくるよ」

そしてバイクに乗り、昨日のマンホールへ。羽化する前に全て狩らねば。使命感に身を任せて走り出した。

思った以上にセミアマゾンは手強かった。戦い慣れたアマゾンオメガでも多数相手取れば苦勞する程度には。

「はあ……うっ」

一人へトドメを刺したその隙に二人のセミアマゾンに抑えられる。そしてもう一人がオメガは近づく。

その時。

「……アマ……ゾン！」

『Y・P・SI・LO・N』

機械的な声と、ゴクゴクと液体の注入される音。悠も聞き慣れたネ

オアマゾンズドライバーの音だ。

黒い熱波動に跳ね飛ばされるセミアマゾン達。そこに立っていたのは、黒く刺々しく、なおかつ機械的なアマゾン。

簡単に形容するならば……

「黒い……ニューオメガ……」

それが一番似合っていた。黒いバイザーの下に、煌々と赤い目が光る。アマゾンイプシロンだ。

「切断する……」

『blade loading』

アマゾンブレイドを生成。セミアマゾンの腕を引きちぎるように切断した。

「……！」

そして無口に、効率的に、素早くセミアマゾンを殲滅した。

「ありがとうございます……ごいます」

「……悪いが水澤悠、お前にも死んでもらう」

その一声に、アマゾンオメガが構える。

再び、今度は自身を見据えて剣を構えるアマゾンイプシロンを前に、アマゾンオメガはナイフを抜いて対抗した。

「や、やっぱり……」

光は走って先日のマンホールへと向かっていた。戦いたくなくとも、真がやられるのは嫌だった。彼女がいなくなつては、アマゾンを守る者は水澤悠しかない。それに、命を救ってくれた人でもある。

「あ、ま……ゾオン！」

『FAI……』

アマゾンファイへと姿を変え、マンホールへと近づいた、その時。

「セミ以外にもいたか……アマゾンは一体残らず狩る……！」

銀髪の青年が近づいてきた。その手には、アマゾンズドライバー。腰に巻きつけ、そのグリップに手をかける。

「アマゾンツッ!!」

『ZETA……』

『S l a y a n d S l a s h ! s l a s l a s l a s l a s l a s h !』

緑の波動。周りの植物に同色の炎が上がる。

アマゾンゼータ。翡翠のカマキリの狩人が現れた。

アマゾンゼータはアームカッターを構え、ジリジリと距離を詰める。

「僕は・・・今も昔も人間だ・・・!!」

対しアマゾンファイは双剣を抜き、距離を離れた。

『b i t e a n d f a n g ! f a f a f a f a f a f a f a n g !』

「うおおおお！」

アマゾンイプシロンとアマゾンオメガの戦いに、アマゾンデルタも割り込んでいた。アマゾンオメガを味方する形での協力であるが、その二人でも勝てないほどネオアマゾンズドライバーは、そして作久間は強い。

「ううー！」

アマゾンデルタが叩きつけられ、その動きが止まる。

『A m a z o n b l a d e』

その隙にオメガへ必殺。突き立てたアマゾンブレイドを掴むが、抑えきれずアマゾンズドライバーに突き刺さる。

変身用の器具失い、人間の姿へ戻る。しかしそれも一瞬。アマゾン態となり、再び飛びかかる。

「悠・・・！これを!!」

残る力を絞って立つアマゾンデルタ。アマゾンイプシロンヘッドロップキックを当てると、すぐにネオアマゾンズドライバーを悠へ投げ渡した。

「インジェクターは持ってるだろ・・・それで！」

「邪魔をするなど言っただろ！」

今度こそ蹴りを食らい、完全にダウン。苦しみの声を上げた。

「ありがとうございます……僕は……あなた達を守る！」

『NEW O・ME・GA』

「アマゾン!!」

今度はより強い衝撃波。機械的な姿のアマゾンニューオメガがその姿を見せる。

『blade loading』

「守るために……君を狩る……！」